

韓民族の肉食考 —高麗時代を中心に—

イム チャンヒョク※
任 章 赫

1. はじめに

日本において焼肉とは韓国のレストランを思いだすぐらいよく知られている。日本で焼肉の人氣があるというのは日本人の味覚によく合うということである。日本より韓国の方が様々な肉料理があり、儀礼において供物として肉をよくもちいている。その差異は歴史的背景・地理的環境・基層文化の相違などの様々な構成要素の相異から基因した結果であろうと考えられる。

韓国人の食生活において肉は食物全体の中で重要な活力源となっていることに對し、それに關する研究は不十分である。韓国民俗学の食物に關する研究は、穀物のみを主な対象にしており肉に關する研究はほとんどないとも言える。本考はこのような反省と共に肉食史における重要な高麗時代を中心に書くことにする。

2. 研究史

韓国の各種の祭りの中で肉の共食が行われているが、それがどんな意味を持っているのかについてはまだ十分に究明されていない。肉食生活に關する研究は民俗学・人類学においてよりも食品史研究の対象になってきた。したがって、従来の研究成果は、調理法と、歴史的視点からの肉食生活変化など二分野にわけられる。その代表的な研究をとりあげてみる。

家政学の中で食生活史を専攻している尹端石は『韓国食品史研究』の中で肉食史に關して若干言及した。尹は食物と調理法の発達によって形成期・完成期・発達期の三期にわけた。各時期の肉食に關して、形成期には家畜と狩猟に依存し、完成期である中世の高麗時代に入ってから北方の契丹、女眞族との交流が多かったので家畜の輸入と共に調理法が伝来されてきた可能性もあり、国の崇佛政策によって肉食は節制されたと言える。しかし、高麗末期には肉食を主食とする蒙古の影響によって調理法の発達と共に一部貴族の間では肉食が盛んに行われた。発展期の調理書の中には兎、羊、雉などの色々な動物とその部位による調理法が詳しく書いてあって、調理法が大変達していたことが分かる。このような尹の肉食史論とは異なって、李盛雨は『高麗以前の韓国食品史研究』の中で、高麗は崇佛政策を取ったので殺生禁止令あるいは屠殺禁止令が行われたが、現実的には肉食が認められていたと論じた。特に、李は元の支配では佛教の崩壊によって、肉食が生活の中で定着される機会になったと指摘した。この点に關して李には、具体的な説明はないが、おそらく彼の著書である『朝鮮時代調理書の分析的研究』と「韓国の古料理書」をもと

※筑波大学大学院歴史・人類学研究科

にしたと考えられる。李の二つの論文の内容は、『山林経済』（1715）の肉調理法が中国の元系の『居家必用』の内容と似ていることを重点にとりあげている。すなわち、高麗時代の肉食は高麗末に蒙古人によって取り戻されたという具体的な内容が『居家必用』に盛んに見られるし、これは、また朝鮮時代を経て今日にも及んでいるのを論じている。

この二人の見解の相異は高麗末に元によってどの階層までが影響を受けたかによる。また、肉食史全般において、高麗時代は転換期となるので、それに対する再検討は必須の作業であろう。従って、その時代の佛教による肉食に関する政策はもちろん、当時、巫俗が盛行したことにも注目しながら韓国の肉食文化について論じる一方、現在まで伝承されてきた民間の肉食についても考えてみたい。

3. 肉食に対する政策

3-1 戦略としての殺生禁止令

高麗は建国初期より佛教を護国思想として国策にも佛教的性格が反映している。その中で代表的なものは「殺生禁止令」と「屠殺禁止令」である。しかし、このような禁止令は単なる佛教思想を伝播させるための目的ではなかったようである。高麗史の光宗19年（968）条によると、「放生所を列置し、寺院に行つて佛經を演習し、屠殺を禁じるのに、肉膳は市廛で買って進む」という記録もあり、成宗7年（987）条には公私の祭祀で犠牲として雌を用いることを禁じている。このような記録の中でわかるのは肉食を全面的に禁じたのではなくある程度認めていたのであり、祭祀においても犠牲は禁じられなかったようである。特に、雌が用いられないのは別な目的があろう。近末、堂祭で使われる祭獣の選び方で、牛は黄牛を、豚は黒豚を選ぶ所もあるが、特に牛、豚、鶏は雄を選ぶ場合が多い。⁽¹⁾ 古代の記録において祭獣の雄雌に関する詳しい記録はないので明らかにできないが、本来、雄雌の区別はなかったようだが、序々に雄を用いることになったと考えられる。雌を祭獣にするのは蕃息を勧めはげますこととして畜産政策の一環で行われた可能性が強い。

殺生禁止令の内容は大きく二つに分けられる。一つは家畜を対象にする屠殺禁止であり、もう一つは漁撈、狩猟までも含む仏教的性格の殺生禁止であるが、漁、猟を含む殺生禁止はほとんどなかったようである。高麗史卷九文宗三十年（1070）には「王が州縣に命じ、人の漁猟を禁じ、これを違え者には罪にする」という記録があり、睿宗2年（1109）には「田獵の時期の選びもないし、農民は火耕によって万物を育成するもくろみにそむくことになるので、天地の知氣を復害するのに一切禁断させて」という記録がある。このような漁猟が禁止されたことは上の記録しかないし、ほとんどが家畜の屠殺を禁止させるのが一般的である。ということは狩猟に対する生殺は認めていたとも言える。一方、王が自田獵を行ったという記録は多い。そうするとなぜ狩猟を認めたのかについてまだ十分に説明できないが、農耕と深い関係があろうと考えられる。

狩猟には二つの種類があり、一つは経済的に狩猟のみに依存しながら生活する専門狩猟民、も

う一つは山民として畑を耕作し、野獣は農作物に被害を与えるので狩猟する半農半猟の型態である。前者は能動的狩猟といえるし、後者は受動的狩猟ともいえる。文献においてこの二種類の狩猟は区別しにくいほど混同されて使われている。⁽²⁾しかし、二つの種類の狩猟が存在したのは現在の民俗にも残っている。専門狩猟民については知られているので省略するが、畑作民の狩猟伝承について簡単にいえば、二つの点を取り上げられる。第一はチアムという狩猟方法である。⁽³⁾山の背あるいは村のまわりに円形や四角の穴を掘って、口は草や木の枝などでおおっておく。落とし穴に落ちた猪は穴の側面を口先で掘って、穴を埋めて逃げ出すこともあるのであらかじめ穴の底に先を尖らせた棒などを打ちつけておくのである。この方法は農作物に被害が多いイノシシを主な対象として行う狩猟として、狩ったイノシシは生きたまま狩る家畜としても用いられる。このような方法は日本東北地方で考古学上において多く発見されている。第二は、屠殺法において叩いて殺す方法が現存する。村あるいは畑に入ってきた野獣を叩いて殺すのは一般的である。この方法は日本にも現存しており、韓国においても犬の屠殺法に残っている。従って、狩猟禁止はある意味で畑作民の農耕生産を奨励した側面もあったと考えられる。国として稲作よりも畑作が中心になる農業経済においては畑作の生産性を上げるのは必然の政策であった。一方、畑作民にとって狩猟活動によって得た野獣は肉食の機会にもなったので、牛馬などの家畜の屠殺を禁止した時代においては農作物の有害動物の狩猟活動による肉食に大きく依存したと考えられる。

3-2 畜産振興

高麗時代の牧畜に関する光景として『東国李想国集』(1241)で「野には牛が散牧されており……」という字句があり、国家事業として牧場を設置したのは様々な目的があった。馬と牛は戦馬あるいは雑馬として戦争と運搬に用いられるし、その他にも食用として乳加工も考えられるが、主目的は農耕での利用であった。『高麗史』列傳には次のような記録がある。「明宗代の李純后が酪酥を上納するので幾民の農牛を破れるのはもちろん、その薬効が備急には適当ではないと上疏した」この牛乳でつくった酪酥は薬用として使われたと判るし、民間ではなく王族あるいは貴族の間だけに限られていたものであった。その他に乳の利用として乳酒がある。高麗時代に乳牛所を設置し、乳酉をつくったり、食用としても加工したそうである。しかし、それは蒙古との関係によるものであり、民間への影響はなかった。忠烈王の王妃である斉国公主が来て宴会を設けた時に羊酒・馬酒が出たという記録はあるが、乳加工の伝承はほとんどない。蒙古人にとって乳加工品は重要な食糧資源であったので、乳牛所を設置したのは食糧調達のためであったと考えられる。

一方、佛教において飲乳を禁じていないのに牛乳を飲まなかった点からみると乳加工の未発達 は佛教による影響ではなかったと考えられる。従って、畜産奨励策は牛馬の農耕への利用と深い関係があろう。文献の中で初めて犁耕法が出てくるのは古代新羅の智證麻五千三年(4C)に牛耕を行ったという記録がある。一方、朝鮮前期になって犁耕が普遍化した点からみると、⁽⁴⁾その中間に当る高麗時代に犁耕法が広く普及したのであろう。

このような殺生禁令による畜産奨励策は蒙古の介入以後からその目的を異にする。「高麗史」では調宣王五年(1308)に打囲⁽⁵⁾及び牛を屠殺することを禁じた記録もあり、忠肅王二五年(1325)には牛馬を屠殺するのを科罪にした。このようなことは耽羅⁽⁶⁾あるいは珍島で牧場を開設し、畜産を奨励したことと同じ軸とする。すなわち、耽羅から牛肉を元に朝貢させたことからみると食糧調達のための目的があったのである。元宗十二年(1271)には農牛6000頭を要求したこともあり、鳳州屯田経略司は明紬12350匹を持ってきて農牛3000頭を要求したこともあったが、その目標を達成せずに帰ったこともある。蒙古の家畜徴発下にも牛耕奨励策は進められた。忠肅王12年(1325)には鶏豚カモなどを飼って客接待と祭祀に使うようにし、牛馬を屠殺する者に対しては罰した。また、共民王十一年(1362)には禁殺都監を設置し、農牛を保護した。禁殺都監は佛法による殺生禁止を監督するのではなく、農耕推進のために役畜の屠殺を防止するものであった。このような点については『高麗史』例博の趙浚の上疏文の中に明らかに表われている。彼の上疏文には「食は百姓に天となり、穀物は牛によって現われるので、国で禁殺都監をおくのは農耕を大事にし、民生を豊かにするためである。が、白丁が牛を殺して食べるので耕食の代わりにしている。これは西北部で特に多い、州郡と各の驛での牛肉食を禁じさせた。……もし小居に入れて豚鶏を飼うと民の争いもなくなるではなかろうか。必ず、京畿に鶏豚牧場を二つ建立し、一つは典廩署に管理させて宗朝の祭祀用に用いられるようにし、もう一つは司宰府に主管させて御庖と賓客用にし、州郡の各々の驛にもこれを飼うようにすれば数年後には祭祀と賓客に十分であろう考えられる。」という記録があり、いくつかの点がわかる。高麗末において農耕の生産増加のために牛馬の屠殺は厳しく禁じられた。また、肉食は全面的に禁止させたのではなく、豚鶏などの農耕とは関係が少くない家畜に対しては許可させた。特に、肉食が行われるのは祭祀あるいはお客さんが来た日などのハレの日が多かったし、日常における牛・豚の肉食はほとんどなかったようである。

3-3 巫俗の興行

高麗時代の国家思想は一般的に佛教といわれるが、巫俗の盛行にも注目する必要がある。古代から三国初期まで巫覡は「王者」「尊長者」の性格をみせており、のちには「神巫」「師巫」「王政輔任者」などの性格を見せていた。一方、十四世紀頃からは、すでに佛教儒教などが入りはじめているので、状況は複雑となり、巫俗はその権力の座からだんだん離れて行ったことであろう。⁽⁷⁾

儒教の伝来は元の侵入と共に大きく影響を受けて儒学ではなく儒教として、その性格は実践性を強調する宗教として伝来された。朝鮮時代に入ってから国家思想として儒教を選びとることにしたので、様々な祭祀において儀礼の復礼の複雑な進行方法は高麗末期の実践を重要とする儒教として伝来し、定着したのである。巫俗の儀礼においても儒教の要素があるのは時代的に高麗末の巫俗の再興行とも関係を持っていると考えられる。

高麗初期の佛教は佛教的性格のない儀礼(入闕会・燃燈会など)も佛教的儀礼として行われたので巫俗は自然に衰えしなびて縮むようになった。また、巫俗の儀礼では祭獣を犠牲とするのも

重要な儀礼のプロセスの一つなので、「殺生禁止令」下の巫俗は衰退されたと言える。その例として祈雨祭を調べてみると明確になる。高麗前期から後期まで様々な祈雨祭があったが、佛教と儒教による儀礼のみを取り出して表を作成すると次の通りである。

巫	顯宗	12/5	(1021)	肅宗	6/4	(1096)	仏	靖宗	2/5	(1036)	7/5	(1041)	
				11/5	(1133)	11/6		文宗	6/6	(1052)	宣宗	2/4	(1085)
				12/6	15/5	18/6		宣宗	2/5	(1085)	4/4	(1087)	
	宗	16/5	(1121)	明宗	3/4	(1173)		肅宗	1/5	(1096)	6/4	(1101)	
俗	明宗	8/5	(1176)	高宗	37/5	(1250)	教	容宗	1/7	(1106)	11/5	(1121)	
	忠烈	10/5	(1284)	15/5	(1289)	仁宗		1/5	(1123)	18/6	(1140)		
		30/4	(1304)	32/4	(1306)	高宗		30/5	(1214)	37/5	(1250)		
	忠肅	3/5	(1316)	5/2	(1306)	忠穆		3/5	(1347)				
		11/4	(1329)										

上の表でわかるのは、前期においては佛教による祈雨祭が行われたが、後に入ってからには巫俗によって盛んに行われた点である。後期においてなぜ巫俗が成行されたかについては色々な意味で解釈できると思われるが、その一つとして肉食を国のレベルである程度みとめたのも重要な契機であろう。前期において「屠殺禁止令」は仏教儀礼による祈雨祭ではない場合にも現われている。顯宗元年（1010）には「長い早によって宗廟で雨を祈る。市場を移し、屠宰を禁じ、緞扇をことわり、冤獄を審らかする」という記録があるが、瑞宗元年（1035）の祈雨祭にも屠殺の禁止は変わらず明記されてある。従って、初期の祈雨祭では佛教の影響による一時的な肉食禁止が分かれるのであろう。

佛教によって沈滞されていた巫俗が高麗後期になって再び盛行になった。それは前に述べた通りに祭りの祭獣使用の許可によって国家の祭祀において犠牲が行われた結果であろう。特に、祭獣使用の許可は、今の段階で断言しにくい、元の支配下のアイデンティティの一環として行われた可能性があろう。韓国にける祈雨祭は王権と深い関係を持っているし、古代の民族宗教として巫俗信仰があった点からみれば、その可能性は十分あるだろう。一方、巫俗が社会的に問題になったのは高麗中期である。『高麗史』仁宗2年（1124）では「近來巫風が盛行し、淫する祭祀が盛んだったので、請するのに、有司に命じて巫群を遠い所に追い出すように勧めた」という記録がある。初期、佛教によって排除された巫覡は民間へ目を向けたと考えられる。従って、佛教の受容によって民間における巫俗はもっと広がるようになっていった。このような時代状況からみれば後期の祭獣の許用は社会的欲求を受入れる当然な政策であった。

4. 民間における肉食

殺生禁止と肉食との関連を理解するために肉食史全般における転換期ともいえる高麗時代の肉食に関する政策について調べてみた。しかし、韓国人の食生活における肉食の位置づけあるいは他の食物との関係についてはまだ不明確なところが多い。このような問題点を少しでも克服する

ためには民間の肉食に関して考えてみる必要がある。現在のさまざまな研究書あるいは報告書では各種料理の調理法が詳しく報告されている。これは民俗学の本来の目的とは異なり、伝統料理の復元あるいは伝承を目的に調査あるいは研究が行われたからであろう。このような反省と共に民間における肉食を再検討すべきであろう。

4-1 肉食の位置付け

日常生活の中で肉食がどのような位置を占めてきたのかについて考えてみる。家畜飼育において去勢方法はあまり発達していない。去勢とは肉食を前提として雄を食肉用として肥育する技術である。たとえば、中国の苗族の場合は豚牛馬犬鶏などの家畜に対して去勢を行っている。韓国において去勢に関する正確な報告はないが、その歴史は短いし、一般的に豚が主な対象として行われている。しかし、場合によっては牛馬羊鶏などにも行われたようである。特に、北部地方である咸鏡北道では雌豚が仔をはらめないように子宮を取り出す去勢方法がある。が、それは盛んに行われた方法ではない。堂祭に用いられる祭獣は去勢されていないものを選んで点からみても韓国人にとって去勢は新しい技術であり、良質の肉を得るために受入れたのではないようである。牛馬の去勢は性質を温和にし、役獣として利用するためであった。というのは、牛は前にも述べた通りに食用肉の家畜よりも役獣としての機能が大きいし、馬肉が食用されていないことから明かである。一方、豚鶏羊に対する去勢は良質の肉を得るためであろう。しかし、去勢というのが民間知識として一般化されたとは言にくいし、信仰的な面において、祭獣として拒否されたことからみると山神を信仰する人々とは別の系統として伝来されたと考えられるが、この点に関しては今後の課題である。

大部分の食文化において食事の内容は主食と副食の二つのカテゴリーにわけて考えられている。文化圏のレベルで言えば、主食と副食の対立は、穀物栽培のなかでも稲作文化においては、かなり普遍化した現象であるが、狩猟・採集牧畜根栽農業に経済の基礎をおく文化になるとその対立はあまり意味をもたなくなってくるという。⁽⁸⁾ 韓国の食文化あるいは主副食における肉食の位置付けの問題はその手がかりとして肉の保存食を考えてみる必要がある。16Cの文献である『閩壺是議方』⁽⁹⁾の中に肉を貯蔵するのに薪の火の煙でいぶす一種の燻製法が書いてある。この方法はヨーロッパでハムを作るのとは異なり、乾燥させた後で虫を防止するための方法である。その他にも素乾法と塩乾法がある。塩乾法は魚類の保存方法としてよく知られているものであるが、塩は民間で入手が難しかったことからみると素乾法が最も知られていたのではなかろうか。『新增東国輿地勝覧』の中にある肉脯、鹿脯と雉脯などは素乾法によるものである。

保存食としての脯は日常食の中で大きな部分を占めなかったようである。脯に関する初めての記録は『三国史記』新羅本記・新文王三年(683)に王の結婚するときに幣帛品の中で脯があるが、現在では酒饌として食う場合が多い。昔、肉脯は家礼あるいは堂祭の供物として使われていた。『部落祭』の中で「脯は牛豚の乾肉であるが、多くはこの代りに乾明太鮮(スケソウダラ)を用いる」と報告している。本当に肉脯の代りに乾明太魚が代用されたのかについては疑問があるが、

確実なことは脯はハレ食であったということである。脯の作り方は肉を薄く切って乾かすので大量に乾すのは不適當であり、ハムのように大量に燻製する方法は韓国にはなかったといえる。従って、脯は貯蔵食よりはハレの日のための保存食品的な性格がつよいので、韓国人の肉食はハレ食ともいえる。

4-2 肉料理の調理法

肉の調理法を分類すると湯・鍋・焼き方などの三つとして分けられるが、その中で普遍的なのは湯である。『韓国の民俗大系』の中で全国的に分布しているのは狗湯である。調理法は地方によって異なるが、犬の脚を煮て、ニラと長葱を長目にぶつ切りにする。醬油にはニンニク・胡椒・粉唐辛子をたくさん加えて食べる。狗湯はユッケジャン（肉湯）と作り方がほとんど一致している。狗湯は全国的に分布しているのに儀礼ではほとんど用いられない。智異山間では、靈山の下にあるので犬を殺してもいけないし、またその村に行っても食べることも禁じられている。それは狗肉を食べて山へ行くと山神の怒りを買うと言われているからだという。現在も犬肉を食べるのは村の内ではなく外であり、屠殺するのも河辺で行うのが一般的である。これらの点からみると山神との関わりが強く、このことは恐らく犬を山神の使者として考えた可能性もある。

狗湯は真夏に夏負けをしないための健康食として知られている。慶尚北道では端午に狗湯を食べるところもあり、北部地方では狗彼革の利用と共に夏のみの季節食ではなかった。狗湯の他にも湯類の数が多い、その調理法は儀礼に使う湯類とほとんど一致しているので次節で論じることにする。ここでは蒙古の影響を受けたと一般的にいわれる湯に関して論じることにする。

李盛雨は彼の著書あるいは論文の中で元の影響による肉料理としてソンス湯⁽¹⁰⁾・ソルロタン・カルビタンこの他にも片肉などを取り上げている。李は「居家必用」の内容と「山林経済」との比較と共に現在わが国の肉食生活に伝承されているものを参考しながら結論を出している。が、これに対していくつかの問題点がある。第一に、「居家必用」は著書未詳で中国の元代初期の本として女眞食品と回回食品が独立された項目として扱われている。ただ、元代の本である点のみを考えて著者を蒙古人として考えるのは無理である。第二、「居家必用」の湯は野菜類をたくさん入れるのが特徴であるが、蒙古の湯は皮を剥き肉を骨と共に適宜に切ってその肉を骨つきのまま鍋で水煮し、塩なども入れないのが一般的である⁽¹¹⁾。第三に、「居家必用」の主な調味料として塩と食醋を使っているが、韓国の肉料理で食醋は使っていない。第四、「居家必用」では羊馬牛豚などの調理法が紹介されているが、蒙古人は豚を食べなかった。それは回教徒が宗教理由から食べなかったのではなく、草原における蒙古人の生活様式、飼料などの関係で家畜としての豚は存在しなかったからだ。⁽¹²⁾ また、蒙古人の代表的な羊馬の肉食は韓国ではほとんどない。馬は神聖視された動物なので食べなかったというのが定説である。古代から食べてきた羊をなぜ食べなくなったのか疑問が残っている。以上の四つの点からみると「居家必用」は純粋な蒙古の料理法を載せたのかについて再考する必要がある。また、民間のレベルで蒙古の影響を受けたものはほとんどなかったと考えられる。ソルロタンは蒙古の湯類ともいわれている。現在、ソルロン

タンがある食堂は全国に広がっているが、数十年前まではソウル市内しかなかった点からみても蒙古の調理法から影響を受けたのは一部貴族だけであったと考えられる。

4-3 ハレ食としての肉食と祭獣

供物として肉を用いるのは堂山祭・豊魚祭・祈雨祭など共同祈願はもちろん、通過儀礼においても肉は必須的なものである。しかし、産育儀礼においてはさまざまな禁忌があって、産母には肉食が禁じられているのが一般的である。

ハレ食における肉食は共食あるいは会食としての意味があるのではなく、祭獣の選びから屠殺・調理・会食・祭物の分配など様々なプロセスを通じて行われるので単なる共食・会食のみを対象にして理解しようとするのは無理がある。従って、全般的な過程の中で理解すべきである。

堂祭で用いられる祭獣としては豚牛鶏が一般的であり、地域によっては鹿羊犬なども用いられる。一方、直接祭祀に用いられる部位は頭・舌・耳・肋骨・胃・睾丸・血・皮・肝臓・肺・脚などの十二部分で、それらを少しずつ取って供えるが、これらの中でもっともよく使われるのが頭・肋骨・脚・血である。これらがどんな意味で供物として使われたかについては儀礼の性格によって相違がある。が、一般的に頭と脚のみを供える場合は全体を象徴するものであり、頭は頭蓋崇拜から伝承された場合もある。血は供物としても精力を付与することになり、一方では血を撒き散らすことによって清浄を願う場合もある。また祭物の処理過程において骨を大事にすることも認められる。一方、これらの骨・血・頭の利用は宗教的な点からみると巫俗に近くて、狩猟民の肉食習俗とも関連性を持っている。特に豊魚祭においても主な供物として豚を使っている点からみると巫俗の影響が大きかったといえる。

祭獣としては手に入れやすい豚牛鶏などの家畜類である。本来、祭物としての牛は重要視されて用いられたが、費用のかかることによって豚あるいは鶏に変わってきたと一般的に言われている。が、このことは必ずしもそうではなかったと思われる。『三国史記』雑誌の新羅の祭祀編では「八楷，十二月寅日，新城北門，祭入楷，豊年用大牢，凶年用小牢」という記録があり，農耕儀礼の報祀的な性格として豊年には牛を，凶年には羊を供物として用って祭りを行なったということがわかる。従って，牛の代わりに羊を用られたといえる。豚も祭獣として用いたのは色々な文献から出てくる。『三国史記』卷十三高句麗篇では「効豚が逃げたので，王が薛支に命じてついて行かせた。薛支はそれを国内の尉那巖で補えた。それを国内人のうちで飼うようにしてからもどって来て王に次のように話した。臣が豚を追って国内尉那巖まで至ると，その山水が深検し，地が五穀にちょうどよく，産物が豊富であるのを見ました。もし，王があそこへ国都をうつせば，単に民利が無窮であるのはもちろん，兵亂を避けられますと話した」この記録からわかるのは儀礼に用いた祭獣として豚を飼っていたことである。またその豚はイノシシである可能性が多い。祭獣としてのブタはどんな儀礼で用られたかについてはまだ明らかになっていない。ただ，『三国史記』例伝五卷，温達説話の中で「高句麗は春三月三日，楽浪之邱であつまって狩猟を行い，獲った猪鹿で天及び山川を祭る」とあり，これは山川神に対し祭るのがわかる。三月

三日は季節祭として山川神に対する春祭であり、農耕における春耕祭的な意味はほとんどない。
『韓国民俗総合調査報告書』の北部地方の三月三日行事では次のようなことが報告されている。

○泉・水がわき出る所へ行って祭りを行う。

(平安南北道)

○巫女によってクッを行う。巫具を全部隠す。その後、隠した巫具をさがすと巫女によってクッをさせる。もしさがせないとクッをさせない(沙理院)

○水辺で婦女子たちが遊ぶ(北青郡)

○国師堂で山川致誠と国師致誠を行う。(曾寧郡)

これらの三月三日の事例では農業との関わりが少なくないので農業とは別の系統の山川神に対する行事として行われてきたし、そのときに祭獣は狩猟によって狩ったイノシシあるいはシカが用いられる。従って、農耕儀礼では牛羊を用いるし、農耕以外の儀礼では猪鹿など対応があったようだが、それがだんだん互いに習合されたと考えられる。

共同儀礼で用いられる祭獣は屠殺と解体した後、一部分は供物として使うが、その残りは全部各戸に均等に分配されるが一般的であり、共食も行われる。そのときが人々が肉を食べられる機会にもなった。

5. おわりに

高麗時代の「殺生禁止令」あるいは「屠殺禁止令」は佛教政策によることよりも畜産振興の一環として行われてきたといえる。畜産振興は牛耕の奨励とそれによる農業の生産増大の目的であった。それに関しては雌雄の差別あるいは家畜類による屠殺禁止令の相異によって明らかになっている。高麗前期において狩猟をある程度許用したのは民間の肉食を狩猟活動に依存するようにしたことでもあり、畑作民にとっては農作物に被害を与える野獣をつづいて狩れるようになったということであろう。

祈雨祭を通じて高麗時代の儀礼の性格を分析してみると前期では佛教的儀礼が多いし、後期になると巫俗による儀礼が多い。それは祭獣を用いられるようにした結果であろう。巫俗はある意味で肉食を許可する宗教とも言えるので民間における巫俗の興行は会食の型態として肉食を盛行させたともいえる。

民間において肉の貯蔵方法が発達していないのは肉食がハレ食であり、個人あるいは家族単位の食生活として発達したのではなく、共同の集団食として展開してきた結果であろう。一方、家畜飼育術において去勢術はその歴史が短いし、良質の肉を得るためよりも家畜の農耕への利用のために行われた。

韓国人の肉食はハレ食として位置付けられる。日常食生でもよく食べる湯類の調理法は儀礼の供物としての湯類と調理法が同様である。また、その調理法は湯類の調理法と異なるので、蒙古

による影響はほとんどなかったと思う。ただ、影響をうけたのは一部貴族だけであった。

今後の課題としてハレ食としての肉食がだんだん日常食になっている。これは世界的にも一般的な趨勢であり、一般的に歴史的な事件と深い関係を持っている。韓国の場合も朝鮮時代の後期を再検討する必要がある。たとえば、前にも論じた通りに蒙古の影響を受けた一部貴族の肉食法は現在民間の日常になった。そのようになった契機についてまだ十分な研究はない。従って、今後研究が要望される。

註

- (1)『部落祭』 P 318
- (2)田獵と狩獵は同一意味として使われているが、おそらく田獵は畑作の狩獵活動を意味したのではなかろうかと考えられる。
- (3)『韓国民俗綜合報告書』全南編 P 373
- (4)李鎬澈『鮮前期農業經濟史』 P 308
- (5)狩獵方法として狩りをするとき、包圍して狩ること。
- (6)今の齊州島。
- (7)張籌根『韓国の民間信仰』 P 20
- (8)石毛直道編『世界の食事文化』
- (9)1670年頃のハンゲル調理書で著者は慶尚南道英陽郡に住んでいた李朝明の妻、張氏婦人である。中国料理書とは何らの関わりもなしに昔から伝えられたもの、もしくは日頃自ら開発した料理をありのまま書き留めておくことにより後孫らに伝統的な家門料理法を伝えようとしている。
- (10)屠殺する時、血をもらておく、その血が凝古したら、それを切って湯に入れて食べる。
- (11)感鏡道では、骨を傷付けないように手で肉を裂くのが一般的であり、刀はできるだけ使わない。
- (12)米内山庸夫「蒙古人の生活と蒙古羊」 P 46

参 考 文 献

(韓国語版)

- 李盛雨 1986 『高麗以前の韓国食生活史研究』 郷文社
『朝鮮時代調理書の分析的研究』 精神文化研究院
- 尹瑞石 1974 『韓国食品史研究』 新光出版社
- 高大民族文化研究所 1980 『韓国民族文化大観』 2 日常生活 衣食住編
高大民族文化研究所出版部
- 李鎬澈1986 『朝鮮前期農業經濟史』 ハンキルサ
- 文化財管理局 『韓国民俗綜合報告書』

(日本語版)

米内山庸夫 1931 「蒙古人の生活と蒙古羊」『蒙古』 8-3・4

蒙古研究所 1933 「蒙古風俗の研究と解説」『蒙古』 10-1~6

青山富太郎 1941 「蒙古人と漢民族との関係」『蒙古』 8-2

石毛直道 1973 『世界の食事文化』 株式会社ドメス出版

〃 1985 『論集 東アジアの食事文化』 平凡社

張壽根 1974 『韓国の民間信仰』論考篇 金華舎

朴桂弘 1982 『韓国の村祭り』国書刊行会

朝鮮總督府 1937 『部落祭』鮮光印刷株式会社

新刊紹介

阿部年晴・伊藤亜人・荻原眞子編

『民族文化の世界』上, 下

最近の民族と国家をめぐる国内外の状況は、民族文化を対象とする研究者に現代的課題への対応を新たに求めつつある。こうした中、手固い民族誌研究を踏まえ、その上に近年の文化人類学諸理論を消化、吸収した広汎な学風で知られる、大林太良教授の遺稿、東京大学退官を記念して、指導を受けた研究者が中心となってまとめたのが本書である。

「儀式と伝承の民族誌」「社会の統合と動態」のサブタイトルで上, 下二巻が分かれ、さらに全九部に章分けされた、全53編の論文からなる本書の書評は別の機会に譲るとして、現段階の文化人類学の水準を示す本書の中で、アジアの民族文化に関わりのある論文のタイトルだけを紹介して、一読をおすすめしたいと思う。

ヤミ族の船祭(姫野翠), 東南アジアのポートレース(寒川恒夫), アリパンとマーンダナー(小西正捷), 死と歌掛けの民族誌—奄美・徳之島の目手久集落の事例から—(酒井正子), 口寄せに呼ばれる霊(クネヒト・ペトロ), 泰山の神の始源—民間伝承と文献宗教史のあいだ—(鈴木清男), 漢族社会と風水—香港新界の事例を基礎に—(瀬川昌久), 伯公考—台湾客家系農村の事例より—(末成道男), 有応公信仰に見る漢人の世界観(三尾裕子), バリ島の文化史的位置づけ(鏡味治也), フローレスの哀悼歌(青木恵理子), ジャワの人間観(染谷

臣道), 済州島における巫歌神話の機能(玄容駿), 鉄人とシャーマン—神話から英雄説話へ—(荻原眞子), 契とムラ社会(嶋陸奥彦), 韓国における祖先と歴史認識(伊藤亜人), 漢族農民の祖先観およびその変容(轟莉莉), 大理白族の擬制的親族(横山廣子), ベトナムの遷剣湖伝説の形成(宇野公一郎), ビルマの信仰体系と政治権力(高谷紀夫), 聖コリーを待つ時間—アキノ政権誕生の底流—(清水展), 清朝支配とアムール川下流域住民のエスニシティ(佐々木史郎), 壮族の移住伝説とエスニシティ(松本光太郎), アメリカ合衆国におけるアジア系民族集団(小野沢正喜), カーゴカルトと社会運動(畑中幸子), 皮膚病とアモック—マレー王権をめぐる病気の民族誌—(富沢寿勇)他力作が並ぶ中、中国、韓国を扱った論文が多いのは、この方面の研究の層の厚さを物語るのだろう。いずれにしろ、現地調査で得た民族誌に、近年の理論動向を反映した味わい深い論考となっている。生活文化、民族文化のレベルでの相互理解が、遠まわりのようでも国際化の中で必須なものであり、他民族の息吹きが実感できる論考の中に、それを感じた。

(佐野賢治)

A 5 判 上巻607頁, 下巻637頁

小学館刊, 各巻8000円

1990年4月刊